

ラニーニヤとオミクロン株

志村 良知

気象庁は十月、ラニーニヤが強まる兆候が見られると発表した。エルニーニョは良く知られているが、その反対のラニーニヤはあまり話題にならない。

赤道直下ニューギニア付近は島嶼が多いため海流が弱く、海水温が高くなる。海面付近の空気は温められ軽くなって上昇し、気圧が下がる。この低気圧に向かって西から赤道沿いに吹く風が貿易風で、貿易風は表面海水を西へ西へと吹き寄せ、東端の南米大陸ペルー沖では海面が下がる。それを補うため冷たい深海水が湧き上がり、南から寒流のフンボルト海流が流れ込む。赤道ペルー沖は大規模な潮目となり、世界有数の漁場になっている。

夏らしい夏、冬らしい冬、と地球の気候が「正常」なときには赤道ペルー沖はこれでバランスしているが、貿易風は何年おきかの不定期で強まったり弱まったりする。

ラニーニヤは貿易風が強まったときの現象で、赤道ペルー沖の寒冷度は強まり、陸地も含め寒冷乾燥化する。貿易風が弱まるエルニーニ

ヨでは沖に温海水が留まり、陸地は湿潤化し、恵みの雨が降る。ラニーニヤもエルニーニョもペルー沖で起きる現象が地球全体に影響を及ぼすというのではなく、地球全体で起きる気候変動がそこに非常にわかりやすく現れる結果である。

スペインの征服者たちは、パナマ地峡を越えて太平洋岸に出、ここで沿岸航海用の小舟を作り、エルニーニョでフンボルト海流が弱まるのに乗じて南下、ペルー沖に達したと考えられている。かの地に温暖と恵みの雨をもたらす「十二月の男の子」エルニーニョが先行文明を滅ぼす原因となったのだ。

ラニーニヤでは気団と呼ばれる大規模高気圧の波動が大きくなる。日本列島付近では夏は強力な太平洋高気圧が被さってきて猛暑、冬はシベリア高気圧の張り出しで強い冬型になりやすい。ラニーニヤは過去頻繁に大豪雪をもたらした。冬が早く来てインフルエンザが猛威を振るったこともある。今冬、インフルエンザとオミクロン株はどうなるのだろうか。